

曇りなく千年にすめる水の面にやどれる月の影も
のどけし
紫式部

水と信仰

- 02-03 水と信仰
- 04-05 身近な湧き水を歩く～秦野編～「弘法の清水」
- 06 季節のアルバム「年越の大祓と初詣」
- 07-08 ワークショップ「歳神さまと縁起物」
- 09-10 ワークショップ「雛祭りと雛人形づくり」
- 11-12 二十四節気と日本の風習(二) ～清明から大暑～
- 13 古今のうた「水」
- 14 本を読む 「水」
- 15 エッセイ 旅の止まり木・2「百沢温泉」
- 16 弥生神社御由緒 / 編集後記

水と信仰

大祓　く神道と浄めの水

六月三十日は「夏越の大祓」。茅の輪をくぐり、人形で身の穢れを祓い、清浄な心身をもって新たな月日を迎えるための行事である。この大祓式であげられる『大祓詞』では、祓戸の神々によって罪穢れが大海原に流され消滅していくとされている。そして、大祓式において人々の罪穢れを移した人形（形代）は、川や海に流される。古来より水には浄化のはたらきがあると考えられてきた。神に仕える神職は海や川で禊をし、神社をお参りする参拝者はまず、手水舎で手や口を漱ぐ。神事に先立つ修祓では、かわらけに入った塩湯を神の葉先につけて人や物を祓う。水で心身を浄める風習は、古く『古事記』にも見られる。黄泉の国から戻った伊邪那岐命は川で禊をし神々を生むのである。そこには罪穢れを流し消滅させるだけではない、新たなものを生み出し生成させる水の力がうかがえる。多くの神話の中で、国土や神々の誕生と水とが結び付けられている。古代の人たちは、世界の始まりを形のない生命の根源である水のうちにみたともいえるだろう。

国土と神々の誕生　く神話の中の水

日本の神話である『古事記』のなかで、水は多くの場面で重要な要素となっている。例えばこの国の陸地ができるより前、太古には下界はただ一面の海だった。これと似た、原初には世界が水や海で覆われていたという発想は、『旧約聖書』をはじめ世界中の到るところの神話に共通してみられるという。次に挙げるのは『古事記』における国土形成の場面である――

「この漂っている国をしっかりと作り固めよ」、という天つ神の命によって伊邪那岐命、伊邪那美命の二神は天の浮橋に立った。

かれ二柱の神、雨の浮橋に立たして、その沼矛を指し下して画きたまひ、塩こをろこをろに画き鳴して、引きあげたまひし時に、その矛の末より垂り落つる塩の累積りて成れる島は、これ淤能碁呂島なり

（天からの階段にお立ちになって、その矛をさしおろして下の世界をかき廻され、海水を音を立ててかき廻して引きあげられた時に、矛の先から滴る海水が積もつてできた島が淤能碁呂島である）

こうして国土を生んだ二神は次に神々を生む。そこで生まれた速秋津日子神と妹速秋津比売神が河と海に分担して八柱の神々を生んだ。

そのうち天之水分神は、水の分配を掌る神である。『延喜式祝詞』（祈念祭）に「水分に坐す皇神等の前に白さく、吉野・宇陀・都祁・葛木と御名は白して」とあるように、これらの地にはそれぞれ水分神社があったという。人々は稲作に必要な水とその配分をこの神に祈願したといわれる。

この後、伊邪那美と別れ黄泉の国から戻った伊邪那岐命が川で禊をした際に、左目から生まれたのが天照大御神である。この女神はたびたび天の安の河という天上にあるとされている河で活躍する。

かれここにおのおのもおのも天の安の河の中に置きて誓ふ時に、天照大御神　まづ建速素戔嗚の男の命のはかせる十拳の剣を乞ひ度して、三段に打ち折りてぬなともゆらに、雨の真名井に降り濯ぎてさ嚙みに嚙みて、吹き棄つる息吹の狭霧に成りませる神の御名は…

天の安の河をはさんで弟建速須佐之男命とともに、神々を生み合う場面である。素戔嗚の剣を三段に打ち折って天の真名井の水で濯ぎ、口に含んでかみ砕き吹いた霧の中から誕生したのが宗像神社に航海の神として祀られる三柱の女神たちだった。これらの神は母神と同様、水の浄化力のはたらきを受けながら生まれてきたのである。

水の神と田の神

『古事記』における「水の神」の誕生を見てきたが、川神、井戸神など水の神の神格は多様である。水は人々の生活において最も密接で、稲作が食生活の中心になって以降、水不足は生きていくために切実な問題であつ

ためであらう。人々にとって水の神は穀物の豊穰をもたらすべき神とされ、それゆえ田の神と結びつきやすかった。田の神祭りが苗代の水口で行われることが多いが、それは田における聖所とみなされていたからであらう。また、田の神と山の神が春秋に交代するというような田と山の親近性を語る伝承も各地に残り、これはまた水と山の神との親近性をもうかがわせる。水の神が田と山とを結びつけ、一連の神事において重要な役割を担っている例がある。

埼玉県秩父市今宮神社の境内にある「竜神池」は、武甲山を水源とする湧水である。毎年、四月四日に斎行される秩父神社の「御田植祭」では、この「竜神池」から水神を迎える神事が行われる。ここで登場する藁で作られた竜神は、秋の農の収穫期にあたる秩父神社の御例祭において、「御神幸行列」の先頭を行くのである。「春先に招迎した武甲山の竜神を初冬に歓送する」というのがこの祭りの本義であるという。ここには水の生態的サイクルもが表れており、普段から土地の自然と共存した人々の暮らしが想像できる。

神社における神事だけではない。人々は生活の中で、水の神に対して祈願をした。「雨乞い」がそれである。宮田登『江戸のはやり神』によれば、雨乞いは「村全体の農作物の危機に直面して懸命に実修される呪術」であり、その祈願行為の方式はさまざまであった。水の神は村の特定の地や山奥の滝壺に宿しているとも思われ、日照りが続くと、人々は水神を刺激するよう池や滝つぼに汚物を投げ込んだり、水をかきまわしたり、お籠りや精進潔斎をしたという。さらには村中の者が集まり、山頂で火を焚きながら竜王や水神の名を叫び雨が降るよう祈ったという。

水辺の祭祀

水に対する祈り、水神への祈願は、稲作が本格化する以前にもなされていたのではないかと考えられる。人々は川や湧き水といった水辺に暮らし、その恩恵にあずかる。狩猟採集生活においても食べ物を洗い煮炊きをし、生きのために不可欠の水分を得たであらう。

青森県青森市にある小牧野遺跡は環状列石で有名だが、そのすぐ傍に湧水

遺構がある。縄文時代から利用されていた湧水で、その一部に堤状の盛土が築かれている。地元には「竜神様が出る泉がある」、「妊婦が大蛇に食われてしまった」などといった伝説が伝わっていたため調査したところ湧き水が発見され、今もなお水が湧き出ている。当地で水の神を祀り祭祀が行われていたかは定かではないが、湧水の存在が伝説とともに伝えられてきたことから、単に水資源として利用してきただけでなくとどまらないことが想像できる。

弥生時代以降、稲作が本格してからますます水は重要になり、各共同体において集団で水に対する祈りが捧げられてきただろうといわれる。全国各地で見つかる水辺の祭祀の跡は数多くある。

三重県松阪市にある宝塚一号墳は伊勢国最大の前方後円墳といわれるが、多くの埴輪とともに「囲い形埴輪」とよばれる埴輪が三点、埋葬されていた。その埴輪のすべてにおける囲いの中に小型の覆屋と、導水や湧水の表現をもつと考えられる土製品が見つかっており、埋葬された王による「水の祭祀」を表したものと考えられている。

また東京都日野市の落川遺跡では、井戸跡から祭祀に使われるいわゆる「かわかけ」が多数出土しており、井戸を廃棄する際に神事が執り行われた跡ではないかと考えられている。

三重県伊賀市の城之越遺跡には、古墳時代に築造されたとされる、三か所に湧き水源をもつ大形の溝がある。大溝は石組、貼石、立石で護岸されており、当時祭祀に使われていた土器や木製品が数多く出土し、湧水祭祀の場として造られ使用されたものと考えられている。

人々の水への信仰は、このように水辺の祭祀の跡として大地に形としてとどめるものだけでない。民間伝承としても残されている。



宝塚1号墳出土品 「囲い形埴輪」

(「松阪市の文化情報」HPより)

水の神の両義性

水神を現実生存するもの、蛇や鰻、魚などの姿で表そうとするところが古くからなされてきた。蛇はさらに竜、大蛇（おろち）の觀念も導き出した。また、河童は水神の属性を継承しているといわれ様々に描写されるが、共通して「小童」とされる。これは水神のもつ母子神的な発想から生まれたともいわれている。植物界に豊饒をもたらすべき水神は、人間界には多産をもたらすと考えられてきたのである。

しかし、水は豊かさをもたらすだけではない。洪水などの過剰な水、汚染された水は災厄をもたらす。歴史の中で、この国は多くの悲惨な水害に遭ってきた。水の脅威は人間の力では抑えることはできない。この水の両義性は民間伝承として形象化された水の神にも反映されている。素戔鳴命の八俣の大蛇（水神）退治の話をはじめ、水を支配する神（山の主、池や沼の王）に生贄を差し出すという話も多い。水の神は畏怖すべき存在でもあったのだ。

このように古くから人々は水を崇め、恐れつつ大切にしてきたことが、残された神話や祭り、遺跡や伝承から想像できる。現代では水道をひねれば容易く流れ出る水。しかしながらその存在の意味や貴重さを私たちの生命、生活とのつながりのなかでもう一度考えてみたい。

『新訂 古事記』武田祐吉訳注（平成十八年）角川書店
吉田敦彦『水の神話』（平成十一年）年青土社

柳田国男監修『民俗学事典』民俗学研究所編（昭和二十六年）東京堂出版
宮田登『江戸のはやり神』（平成五年）筑摩書房

藺田稔監修『秩父夜祭』、さきたま出版会（平成十七年）

『小牧野遺跡発掘調査報告書』青森市教育委員会（平成十一年）
『水と祭祀の考古学』（平成十七年）奈良県立橿原考古学研究付属博物館編
学生社

小松和彦『山の神、水の妖怪』『人と水』（平成二十二年）人間文化研究機構

尾畑喜一郎編『古事記辞典』（平成五年）桜楓社

身近な湧き水を歩く

～丹沢編～

「弘法の清水」

亀井久美子



「弘法の清水」
（平成二十八年四月筆者撮影）

弥生神社の鳥居をくぐり、急な石段を上がって、社殿から後ろを振り返ると、西方に丹沢の美しい山並みをよく見渡すことができます。その丹沢山地の西の麓に位置しているのが秦野市です。

秦野は北と西側を丹沢山地に、南側を渋沢丘陵に、東側を弘法山に囲まれた盆地で、水無川や金目川によってできた扇状地です。こういった地理的条件の所は地質上、湧水が多いのが特徴です。秦野盆地湧水群と呼ばれ、「全国名水百選」に選ばれています。

秦野の湧水にはそれぞれに伝説や言い伝えがあり、水が人々の日々の暮らしと強く結びついていたことがよくわかります。全国各地に残る弘法伝説の中でも、秦野には水に関わるものが多く、「弘法の清水」もそのひとつです。

「弘法の清水」は、小田急線秦野駅から徒歩五分ほどの住宅街の中にありますが、湧水量は日に百トン以上と豊富だそうで、探しながら歩いて行くとまず水音が耳に飛び込んできます。

昔、弘法大師が水を恵んでもらおうと一軒の農家を訪れましたが、あいにく汲みおきの水をきましており、妻女は離れた所まで水を汲みに行き、大師に勧めました。大師は大変喜び、そのお礼に、持っていた杖を地面に突き刺すとそこから水が湧き出したというものです。この水を「弘法水」と呼び、臼の形に似た井戸だったので、この地を臼井戸というようになったとのことでした。

湧水の傍らには祠があり、この水が地域の方々の信仰を集めていることがうかがえます。

「弘法の清水」の豊富な湧水の水量と対照的で興味深いのが、すぐそばを流れる水無川です。源流は塔ノ岳ですが、その名の通り水はほとんど流れていません。これは伏流という盆地の山側で水流が地下に潜りこみ、地下を流れるという不思議な現象です。この秦野の水無川には、前述と同様に弘法大師の伝説があります。

昔、この川が舟で渡るほど水が多かったころ、

貧しい身なりの僧が渡し賃をもっていないが通してほしいと頼んだが、船頭は金があれば駄目だと断りました。実はこの僧が弘法大師で、大師は法力で川の水を干上がらせてしまったということです。

また、この伏流という現象について『播磨国風土記』には「みなし川」がどのようにできたのか、水の神々と結び付けて書かれています。

石龍比古命（いはたつひこのみこと）と妹石龍比賣命（いもいはたつひめのみこと）が川の水をめぐって争いになった挙句、妹石龍比賣命が地中に密樋（したび）を造ったため、地表を流れる水がなくなった、というものです。

こうしてみると、古代より水は人々にとって信仰の対象とするほど大切なものであり、その自然の恩恵をありがたく思う気持ちを、現代に暮らす私も持ち続け次世代に伝えていきたいと強く感じました。（つづく）

【参考文献】

『別巻 秦野市史民俗編』秦野市編

『秦野の水』秦野市水道局編

「弘法の清水」へのアクセス

小田急小田原線「秦野駅」下車徒歩五分。秦野駅北口を出て水無川に沿って下り、「日本レンタカー」を右に曲がるとすぐ。



水無川と桜（平成27年4月 筆者撮影）

弥生神社 季節のアルバム



年越の大祓と初詣



～番外編～



掲示板



訂正…前号の「境内の草花」で紹介した写真の花は「カシワバアジサイ（柏葉紫陽花）」でした。アジサイはこちらです。失礼いたしました。

夏越の大祓

おめはらへ

六月三十日

午後三時より

どなたでも参列できます。

弥生神社

「夏越の大祓」
六月三十日午後三時より
どなたでも参列できます。

ワークショップ@弥生神社

「歳神さまと縁起物」

～熊手と祝箸を飾ろう～



昨年十二月二十三日、熊手と祝箸を飾るワークショップを開催しました。ご近所の皆さんから市外の方までお集まりいただき楽しい催しとなりました。

弥生神社拝殿にて参拝後、会場にて歳神様や熊手、祝箸のお話をしたのち、ワークショップがスタート。和紙や植物などの素材を選び、小さな竹製の熊手に紐でくくりつけたり貼ったりしながら皆さん熱心に熊手を飾り、華やかな縁起物が次々とできあがりました。

そして、祝箸の袋づくりでは二種類の折り方に挑戦。ご家族のぶんで水引や和紙、水彩絵の具などで素敵な祝箸を作りました。

お正月には神社でも頒布する熊手ですが、皆さんの手づくりの熊手はひとつひとつ個性豊かでとても素敵なものばかりでした。とくに子供さんの作品は大人では創り出せないようなもので、ワークショップの面白さを感じました。



祝箸の袋の折り方は2種類、チャレンジしました。



祝箸 「祝い箸」は、両方の先端が細くなっており、「両口箸」ともいわれます。それは、一方は神様、もう一方を人が使うためで、「神人共食」を意味しています。おせち料理は年神様へお供えし、それを下げて私たちがいただくものです。年神様と食事を共にすることで、新年を祝い、一年の恩恵を授かるように願います。





「初熊手！」

パソコンの前に向かってばかりで、あまり変化のない毎日を過ごしている私ですが、仕事とは違う「楽しい集中」の時間を弥生神社さんのワークショップで見つけました。

三回目の参加で今回は熊手作りを体験。松や稲穂、和紙、トンボ玉など用意していただいた沢山の材料を「あれもこれも使いたい」と欲張りながら出来上がりをイメージし、少し時間がかかりましたが自分らしい熊手に仕上がりました。

今まで熊手を授かった事がなかったのですが、初熊手を自分で作るのもいいものだなと、しばらく眺めて自己満足。まったりとした空間の中で、心地よい集中と手作りの良さをしみじみと感じた一日でした。今年はこのお気に入りの熊手で沢山の幸せを集めたいと思います。

(金野詩暢)



和紙やトンボ玉、江戸打ち紐、水引の他、木の実や貝殻、ドライプラントなど様々な自然素材から、皆さんそれぞれの個性豊かな熊手ができあがりました。

「雛祭り」と雛人形づくり」

～「雛祭り」の習俗に触れ私だけの雛人形を作ろう～

雛祭り間近の二月二十八日、雛人形づくりのワークショップを開催しました。雛祭りの由来や意味、雛人形の種類や変遷のお話を少ししたのち、さっそく絹布や色紐を選び、雛人形作りに取り組みました。お裁縫好きな小学生から長年縫物をしていないという男性まで、苦勞しながら周囲の方と助け合いながら熱心に手作業をして、小さなお雛様を完成させました。貝殻やスパンコールで仕上げの装飾まで頑張り、皆さんそれぞれの作品に仕上がりました。楽しかったと笑顔とともに嬉しいご感想もいただきました。来年もぜひ開催したいと思います。



手づくり和菓子は道明寺の桜餅。(丸型は道明寺にきな粉と桜の花) 付け合わせは菜の花の和辛しとえと雛あられを添えました。



～季節のかんたん和菓子～

「柚子と黒豆の寒天」



「熊手と祝箸」のWSのために作ってみました。ご好評いただきました♪

○材料 黒豆の甘煮100g、水450ml、砂糖100g、柚子（果汁1個分、皮半個分）、柚子の皮（飾り用）適量、粉寒天4g

1. 柚子の皮をおろし金で細かく削っておく。
2. 鍋に水、グラニュー糖、粉寒天を入れて火にかける。混ぜながら2、3分煮立たせる。
3. 2に柚子の果汁、皮、黒豆の甘煮を加えて混ぜる。
4. 型に3を流し込む。よく冷ましてからラップをして冷蔵庫で冷やす。
5. 切り分けて、刻んだ柚子の皮を散らす。



「私だけの雛人形」が
完成しました。

こちらの紙びなを載せている
「棧俵」は、俵の両端にかぶせる
円形の藁ぶたです。神座や神饌
(しんせん)の容器としたり、正
月には年神の御幣(ごへい)を刺
したり、鏡餅をのせたりしていま
した。もともと神道と深く結びつ
いたものなのです。



会場には鳥取市の信夫工芸店で作られた「流
しびな」を展示しました。

流しびな 「流しびなの風習は、室町時代災厄を招く為に、雛を身代わりにして川や海に流す人々の習慣から始まり、旧暦の三月三日に雛を棧俵にのせ菱餅、雛菓子、桃の小枝などをそえていろいろな願い事を雛に託して川へ流しました。現在ではおもに郷土玩具、装飾観賞用として広く親しまれております。朱や金の紙で着物を作り、白い梅鉢模様を散らし、頭は土を丸めて胡粉を塗り、男雛は金色の冠、女雛は黒髪、それぞれ目と紅を描き入れ棧俵にのせた単純ながら素朴な味わい深いものです。」(鳥取市神町 信夫工芸店 信夫賢太郎)

旧暦のなかで使われてきた「二十四節気」。その名称は季節の流れや節目を表すものとして使われ、それぞれの時期に暮らしの中で脈々と受け継がれてきた習わしや食文化があります。今回は、新暦の四月四日頃にあたる清明から七月二十二日にあたる大暑までを紹介します。

清明から大暑

二十四節気と日本の風習 (二)

春

立春 (りっしゅん)
雨水 (うすい)
啓蟄 (けいちつ)
春分 (しゅんぶん)
清明 (せいめい)
穀雨 (こくう)

夏

立夏 (りっか)
小満 (しょうまん)
芒種 (ぼうしゅ)
夏至 (げし)
小暑 (しょうしょ)
大暑 (たいしょ)

清明 せいめい

(新暦 四月四日～十九日頃)

「万物発して清浄明潔なれば、此芽は何の草としれる也」*
◇すべてが清らかで明るく草木が芽吹きだして種類が明らかになってくる季節。

「清明祭(シーミー)」…沖縄で行われる先祖供養の行事。もとは中国から伝わった。門中墓にお参りし、料理、酒、花を供え、供えた後は泡盛を飲み三絃を弾きながら歌い踊る。

【旬の野菜】たらのめ、みつば



*『こよみ便覧』(江戸時代の暦の解説書)より。以下、「*内同」。

穀雨 こくう

(新暦 四月二十日～五月四日頃)

「春雨降りて百穀を生化すれば也」*

◇ 穀雨は『五穀を潤す雨が降る』という意味。春の暖かい雨が降って穀物の芽が伸びてくる季節。

「八十八夜」…立春から数えて八十八日目の夜。「米」は八と十と八の字を重ねていることから、縁起のいい農の吉日といわれている。

【旬の野菜】新こぼろ、よもぎ、こごみ

立秋 りっか

(新暦 五月五日～五月十九日頃)

「夏の立つがゆへ也」＊

◇ 夏の気配が現れてくる頃。この日から立秋の前日までが夏。

【旬の野菜】 にんじん、たけのこ(真竹)

小満 しょうまん

(新暦 五月二十日～六月四日頃)

「万物盈満(えいまん)すれば草木枝葉繁る」＊

◇ 陽気がよくなって、草木などの生物がしだいに成長して生い茂る季節。

「木の葉採り月(このはとりつき)」…小満の時期にあたる旧暦の

四月の別名。蚕の餌である桑の葉を摘む頃という意味がある。

【旬の野菜】 そらまめ、しそ

芒種 ぼうしゅ

(新暦 六月五日～二十日頃)

「芒ある穀類、稼種する時也」＊

◇ 芒(のぎ)とは穂先にある植物の実の外側のかたい毛をさす。芒のある穀物の種まきの季節。



【旬の野菜】 らっきょう、かしゅう(夏秋)とまと

夏至 げし

(新暦 六月二十一日～七月六日頃)

「陽熱至極しました、日の長きのいたりなるを以て也」＊

◇ 夏至は太陽高度が最も高くなり、一年の中で昼間の最も長い日。

【旬の野菜】 みょうが、おくら

小暑 しょうしょ

(新暦 七月七日～二十一日頃)

「大暑来れる前なれば也」＊

◇ 梅雨が明けて本格的な暑さが始まる季節。

【旬の野菜】 へちま、とうもろこし、もろへいや

大暑 たいしょ

(新暦 七月二十二日～八月六日頃)

「暑氣いたりつまりたるゆえんなれば也」＊

◇ 暑気が至り最も暑い日、厳しい暑さの頃。

「八朔(はつきく)」…朔日は一日のことであり、旧暦の八月一日を八朔といい、その頃とれ始める早稲の穂を、お世話になっている人に送る習慣があった。

【旬の野菜】 きゅうり、えだまめ、すいか

(参考) 矢嶋文子『旬のやさしい歳時記』(平成二十六年)主婦と生活社、白井名大『日本の七十二候を楽しむ―旧暦のある暮らし―』(平成二十五年)東邦出版



古今のうた

水

曇りなく千年にすめる水の面にやどれる月の影ものど
けし

紫式部

『新古今和歌集』七二二

「濁りなく、いつまでも永久に澄みわたっているとと思われる（邸の）池の水面に、映っている月の光ものどかである」

眼前の景色をさりげなく讃えている歌だが、藤原道長の娘、中宮彰子に仕えた紫式部が、彰子の出産に際して、賀の心を示した歌である。「千年に住める水の面」には、彰子の生家である藤原道長家を暗示し、月影に生まれた皇子を暗示している。

そんな「賀」の心を示すため、次のような詞書が添えられている。

「後一条院生まれさせ給へりける九月、月くまなかりける夜、第二条関白、中将に侍りけるに、若き人々誘ひ出でて、池の舟に乗せて、中島の松かげさしまはすほど、をかしく見え侍りければ」

時は寛弘五年、中宮彰子の父藤原道長の邸である土御門院にて。第二条関白は道長の五男、教通。来合わせていた若者たちが船をこぎまわしているのが見える。貴族の邸の庭には、池、中島、舟があるのが型であったそうだ。

【参考】窪田空穂『新古今和歌集評釈 中巻』（昭和四十五年）東京堂出版

かすかなる一すじのしらべつづりつつ蛇口より落ちて地に光る
水

大野とくよ『今日わが生きる』（昭和三十三）

銀河系そらのまほらを堕ちつづく夏の雫とわれはなりてむ

前 登志夫『樹下集』（昭和六十二）

水面を風わたるときもとどまりてこの世に馬もわれも夕映え

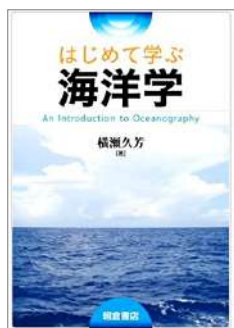
井辻朱美『吟遊詩人』（平成三）

みにもあるものみのもになきもの顔だしてまたしづむものお
ちてゆくもの

日置俊次『ノートル・ダムの椅子』（平成十七）

夏されば水にとがりて菖蒲咲くむらさき立ちたる雲を掃はむ

高崎淳子『朧光亭日乗』（平成十八）



はじめて学ぶ 海洋学

横瀬 久芳／[著]
朝倉書店
2015.9

地球の表面七割を覆う海。人類は海とその大部分を占める水とは無縁ではられません。本書では「海水はどうして塩辛いのか?」「海岸に打ち寄せる波はどこからくるのか?」といった素朴な疑問を総合科学的に解説しています。

本 を 読 む。

「水」を考える

「水」をキーワードに5冊を選んでみました。水のある景色が全く異なった様相で見えてきます。

小河洋友

(東京都内図書館勤務)



街歩き・里歩きの名水・湧水散歩

南 正時／[著]
新潮社
2015.4

著者が訪れた全国の名水・湧水180か所以上を紹介しています。水のある風景を切り取った掲載写真はどれも美しく心惹かれるものばかり。付近の見どころ・寄り所、アクセスガイドも充実しており、大変実用的でもあります。



水の常識 ウソホント77

左巻 健男／[著]
平凡社
2015.9

水道水とミネラルウォーターはどちらが安全? 水をめぐって戦争が起きる? あまりにも身近であるがゆえに、われわれは水について知らなすぎるのかもしれない。本書では水の科学的秘密から、怪しげな水ビジネスのウソまで徹底解説しています。



ミネラル ウォーター・ ガイドブック

早川 光／[著]
福音館書店
2014.6

日本人の生活に定着したミネラルウォーター。ボトルやラベルを見比べただけではどの商品も同じように見えますが、実は1本1本異なる個性を持っています。本書では「硬度って何?」からウォーターサーバーの選び方までやさしく解説しています。



「流域地図」の作り方 川から地球を考える

岸 由二／[著]
筑摩書房
2013.11

あなたは今、どこに暮らしていますか? 行政区分ではなく「自然の住所」で考えてみませんか? 近所の川を源流から河口まで、流れを追って「流域地図」を作るころみ。循環する水と生きものたちでできている生命圏を再発見できます。

百沢温泉

谷口明子（陶芸家）

人間の体は半分以上が水分であるという。ということはもしかすると、その人が出会って吸収してきたいろいろな水分はその人自身に知らぬ間に大きく影響し、形を変えて外に浸みだしてくるのではないか。

最近私が出会って吸収した印象深い水分は、一人旅で訪れた青森県弘前市の百沢温泉である。弘前駅からバスで小一時間。乗客は最初3人いたが、他の二人は地元の人で、私より先に下車してしまい、途中からは私一人となった。三月下旬の弘前は、晴天ながらも気まぐれに天気雨ならぬ天気雪が舞う肌寒さ。それでも市街はほとんど残雪も消えていたが、駅から遠ざかるにつれて景色が冬に逆戻り、いつしか一面雪景色に変わっていた。加速度的に街の気配が薄れゆき、景色が真白になっていく見知らぬ土地の路線バス・・・しかも二時間に一本くらいしか来ない・・・そういう乗り物に一人つきりて揺られていると、なんとも心細い。万が一間違ったバスに乗ってしまったら取り返しが・・・などとぐずぐず思っていたが、ちゃんと百沢温泉に着けた。この周辺はちょうど日向で雪もなく、ふきのとうが群生していてすぐ採りたいと思ったが、地元の人が採取せずに放置しているのに通りすがりのよそ者が採っていくのはどうなのか・・・とまたぐずぐず思い、写真に撮るにとめた。

百沢温泉はすごかった。蛇口からどばどばと茶色がかった熱い温泉が溢れ出し、温泉成分が蛇口の根元に岩のように固まりついている。湯治のための宿泊棟も併設されているためか、いきなり洗い場に全裸の老婆が寝そべってじっとしていたりもして、伊東の観光温泉旅館などではまず体験できない感じの野趣がある。溢れ出る地球の成分をダイレクトに受けている！という感じがして、上がるのが惜しく、だいぶのぼせそうになっても未練がましく出たり入ったりを繰り返した。豆菓子などを開けるといつまでも後を引いて食べやめられない、ということがあるが、ここはまさに後を引く温泉であった。

限界まで温泉を満喫した後、百沢温泉から歩いてすぐの岩木山神社へ立ち寄った。社殿の背後にところ雪に覆われた岩木山がそびえている。あの山からの雪解け水もそのうちこつちまで流れてきて、なんらかの形で私たちの成分になるのかもしれない、と思った。



岩木山神社「雪玉厄落し」



帆立貝と黒ラベル（夕食）

弥生神社御由緒

明治四十二年三月国分に鎮座の八幡社、上今泉の比良神社、柏ヶ谷の第六天社、望地の大綱神社を合祀して創建された。

神社の称号については、御遷座が弥生の季節であり、万物全てが天地の恩恵を受け、栄え行く時であるから氏子一同これにあやかり、弥栄え行くようにとの祈りを込めて、弥生神社と定めた。なお新宮地は、風光明媚な大松原の現在地を最適地として定めた。

御祭神

ほむたわけのみこと
菅田別命
さるたひのみこと
猿田彦命
たかみすびのみこと
高産霊命
やまとたけるのみこと
日本武男



社務猫のつぶやき



お正月には皆さん私たちに会いに来てくれてありがとうございます。雑誌のせいかもしれません。

雑誌のせいね。撫でてくれたり話しかけてくれたり。ありがとございました。写真もたくさん撮ってもらって有名猫になった気分よ。



きーこ



ちよろ

編集後記

第八号がようやく完成しました。テーマをくんだ素敵な文章をお寄せいただいた方々に心より感謝いたします。

六月三十日には夏越の大祓が斎行されます。それを機に水について考えてみる号にしました。身の回りの自然、地域の自然に目を向け大切にすることも、昔からの神道の教えであると考えます。

先の三月十一日で、東日本大震災から五年が経ちました。あの災害と原発事故により多くが失われ壊されましたが、自然の恐ろしさや有難さもまた私たちはあらためて知るところとなりました。自然、水は循環し、そのつながりの中に我々の命と暮らしがあることを感じながら、普段より学び考えたいと思います。

最後になりましたが、今年度の御例祭においてご協力いただきました皆様、心より御礼申し上げます。今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

(権)



Facebook



Twitter

編集・発行 弥生神社

海老名市国分北二一十三三十三

表紙の写真：弥生神社境内に咲くオオマツユキソウ（大待雪草）、別名スズランスイセン（鈴蘭水仙）